

吉田光演先生を悼む

筒井友弥

四月二十六日午前十一時。広島に向かう新幹線の車中で、図らずもこの寄稿のお話をメールで受信した。その一週間前の十九日、先生が亡くなられて三日後、勤務校に向かう道中で訃報を受け、普段と変わらぬ景色が瞬く間にばやけた。涙、ではない。衝撃で脳がショートした感覚だった。「えっ、吉田先生がもうおられない？ えっ、もうお会いできない？ お話できない？ えっ？ えっ？」。一人研究室で「どうする？」と答えのない自問を連呼しながら、なんの見通しもないまま、直近で出講のない二十六日の新幹線チケットを買った。

吉田先生との出会いは、二〇〇一年十二月。翌年四月からの広島大学博士課程進学のため、直接ご挨拶をと東広島は西条に赴いた。東門にある郵便局の駐車場で先に待たれていた先生は、世間知らずの修士生に手を振られ、朗らかな表情でゆつくりとお辞儀をされた。

本寄稿で、吉田先生のご功績を詳しく述べることはしない。ドイツ語学に携わる者が言語学の書を手に取

れば、あるいはもう「吉田光演」で検索すれば、その精力的な研究および教育活動と、驚異的な活動領域、国内外を問わず学界に与えた多大な貢献は言を俟たない。なにを今さら、私などが紹介など必要か。

二十六日午後十二時半。無計画のまま乗車した新幹線から電車を乗り換え、西条駅に到着した。駅から徒歩圏内に、要人やご友人が訪ねられたときに吉田先生がよく行かれた「仏蘭西屋」がある。酒処西条の賀茂鶴酒造が営む日本酒レストランで、私も何度か連れて行っていた。小鉢で献杯をとテーブルに就くが、与えられた選択肢はランチメニューだけだった。時間が時間なのだから至極当然である。困った。まったくお腹が空いていない。しかし十分後には、豪華な「美酒鍋御膳」が運ばれてきた。格好つけの見栄っ張り。先生が嬉しそうに目を細め、朗らかに「そういうことや」と私をたしなめておられる。急に胸が詰まり、そつと俯きながら「一滴入魂」のグラスを傾けた。満腹を抱えて近くの花屋で供花を買い、先生のご自宅に向かう。記憶とはときに凄まじいもので、ご自宅を前にした途端、二十二年前の一コマがありありと目に浮かん

だ。奥様の手料理をご馳走になっているとき、先生が私の手を見て訝しむ。「いやあ参った。初めて家に来るのに、髑髏の指輪をはめて来たから」と、その後二十年を超えて語り草となるこの話を、先生は毎回楽しそうに、大笑いされながら語っておられた。今回の訪問は私の手前勝手な都合にすぎなかったため、心痛の堪えないご家族には、突然にすぎて迷惑にほかならないと、携えた手紙を添えて玄関先に供花を置いた。

帰りの車中で想う。先生はいつも明朗だった。もちろん、研究のことではとても厳しく指導されたが、先生のお顔を思い出そうとすると、必ず笑っておられる。先生はいつも謙虚だった。相手が学生であれ、いや学生であればこそ、先生は常に目線を合わせてくださった。二〇二〇年三月に予定されていた先生の最終講義がコロナで中止となり、代わりに翌年の七夕に開催された特別講義で、先生は「大学とは知の共有の場であり、教員とともに学生が育つ場である」と語られた。吉田ゼミではいつも議論に議論が重ねられた。院生のなかでとりわけ理解の鈍い私に、先生は何度でも理論をかみ砕いて説明してくださった。授業時間が過ぎよ

うとも、そこからさらに数時間。学食で一緒に夕食を食べながら、時には近くの居酒屋でお酌を交わしながら。そんな日が幾度もあった。きつと、他にも仕事如山積していたのに。先生のご家族にもご心労をおかけしていたに違いない。ただ、私にとってそれは、その日々は、かけがえのない温もりで満ちた時間であった。楽しかった。

四十六歳と早くして他界した父の年齢を超えたとき、自らのあまりの未熟さに啞然とし、遅まきながら「生かされる」意味を本気で考えるようになった。これを綴る今私は四十七歳である。二〇〇一年に朗らかな表情で若輩にお辞儀をされた先生と同じ歳である。「紡ぐ」ということはがよぎる。「でも先生、あれほど共有したはずの『知』が、授業で教えようとするとき難しく仕方がないんです。ちゃんと『育つ』ことができずごめんなさい。先生、またご教授ください。いっぱい質問があるんです。まだまだたくさんお話ししたいんです。・・」。

吉田先生、本当に、本当にありがとうございます。感謝しかありません。

(京都外国語大学准教授)